

## 猫の事務所

( N ) 軽便鉄道の停車場のちかくに、猫の第六事務所がありました。ここは主に、猫の歴史と地理をしらべるところでした。

( 黒猫 ) 事務長は大きな黒猫で、少しもうろくしてはいましたが、眼などは中に銅線が幾重も張ってあるかのように、じつに立派にできていました。 さてその部下の

( 白猫 ) 一番書記は白猫でした、

( 虎猫 ) 二番書記は虎猫(とらねこ)でした、

( 三毛猫 ) 三番書記は三毛猫でした、

( かま猫 ) 四番書記は鼈猫(かまねこ)でした。

( N ) かま猫といふのは、これは生れ付きではありません。生れ付きは何猫でもいいのですが、夜かまどの中に入ってねむる癖があるために、いつでもからだを煤(すす)できたなく、殊に鼻と耳にはまっくろにすみがついて、何だか狸(たぬき)のような猫のことをいうのです。

( N ) 大きな事務所のまん中に、事務長の黒猫が、まつ赤な羅紗(らしゃ)をかけた卓(テーブル)を控えてどっかり腰かけ、その右側に一番の白猫と三番の三毛猫、左側に二番の虎猫と四番のかま猫が、めいめい小さなテーブルを前にして、きちんと椅子にかけていました。ところで猫に、地理だの歴史だの何になるかと言いますと、まあこんな風です。

事務所の扉をこつこつ叩くものがあります。

( 黒猫 ) 「はいれっ。」

( N ) 事務長の黒猫が、ポケットに手を入れてふんぞりかえってどなりました。四人の書記は下を向いていそがしそうに帳面をしらべています。ぜいたく猫がはいって来ました。

( 黒猫 ) 「何の用だ。」

( ぜいたく猫 ) 「わしは氷河鼠(ひようがねずみ)を食いにベーリング地方へ行きたいのだが、どこらがいちばんいいだろう。」

( 黒猫 ) 「うん、一番書記、氷河鼠の産地をいえ。」

( 白猫 ) 一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答えました。

「ウステラゴメナ、ノバスカイヤ、フサ河流域であります。」

( 黒猫 ) 「ウステラゴメナ、ノバ.....何と言ったかな。」

( 白猫、ぜいたく猫 ) 「ノバスカイヤ。」

( 黒猫 ) 「さう、ノバスカイヤ、それから何!？」

( 白猫、ぜいたく猫 ) 「フサ川。」

( 黒猫 ) 「そうそう、フサ川。まああそこらがいいだろうな。」

( ぜいたく猫 ) 「で旅行についての注意はどんなものだろう。」

( 黒猫 ) 「うん、二番書記、ベーリング地方旅行の注意を述べよ。」

( 虎猫 ) 「はっ。」二番書記はじぶんの帳面を繰りました。「夏猫は全然旅行に適せず 冬猫もまた細心の注意を要す。函館付近、馬肉にて釣らるる危険あり。特に黒猫は充分に猫なることを表示しつつ旅行するにあらざれば、応々黒狐(くろぎつね)と誤認せられ、本気にて追跡さるることあり。」

(黒猫)「よし、いまの通りだ。貴殿は我輩のように黒猫ではないから、まあ大した心配はあるまい。函館で馬肉を警戒するぐらいのところだ。」

(ぜいたく猫)「そう、で、向うでの有力者はどんなものだろう。」

(黒猫)「三番書記、ベーリング地方有力者の名称を挙げよ。」

(三毛猫)「はい、ええと、ベーリング地方と、はい、トバスキー、ゲンゾスキー、二名であります。」

(ぜいたく猫)「トバスキーとゲンゾスキーというのは、どのようなやつらかな。」

(黒猫)「四番書記、トバスキーとゲンゾスキーについて大略を述べよ。」

(かま猫)「はい。」

(N) 四番書記のかま猫は、もう大原簿のトバスキーとゲンゾスキーとのところに、みじかい手を一本づつ入れて待っていました。そこで事務長もぜいたく猫も、大へん感服したらしいのです。

ところがほかの三人の書記は、いかにも馬鹿にしたように横目を見て、ヘツと笑っていました。

(かま猫)「トバスキー酋長(しゅうちょう)、徳望あり。眼光炯々(けいけい)たるも物を言うこと少しく遅し、ゲンゾスキー財産家、物を言うこと少しく遅けれども眼光炯々たり。」

(ぜいたく猫)「いや、それでわかりました。ありがとう。」ぜいたく猫は出て行きました。

(N) こんな工合で、猫にはまあ便利なものでした。ところが今のおはなしからちょうど半年ばかりたったとき、とうとうこの第六事務所が廃止になってしまいました。というわけは、もうみなさんもお気づきでしょうが、四番書記のかま猫は、上の方の三人の書記からひどく憎まれていましたし、

(三毛猫) ことに三番書記の三毛猫は、このかま猫の仕事をじぶんがやって見たくてたまらなくなったのです。

(N) かま猫は、何とかみんなによく思われようといろいろ工夫をしましたが、どうもかえっていけませんでした。たとえば、ある日となりの虎猫が、ひるのべんとうを、机の上に出してたべはじめようとしたときに、急にあくびに襲われました。

(虎猫) そこで虎猫は、みじかい両手をあらんかぎり高く延ばして、ずいぶん大きなあくびをやりました。足をふんばったために、テーブルが少し坂になって、べんとうばこがするするっと滑って、とうとうがたと事務長の前の床に落ちてしまったのです。それはでこぼこではありましたが、アルミニウムでできていましたから、大丈夫こわれませんでした。そこで虎猫は急いであくびを切り上げて、机の上から手をのばして、それを取ろうとしましたが、やっと手がかかるかかからないか位なので、べんとうばこは、あっちへ行ったりこっちへ寄ったり、なかなかうまくつかまりませんでした。

(黒猫)「君、だめだよ。とどかないよ。」と黒猫が、もしやもしやパンを喰べながら笑って言いました。

(かま猫) かま猫も、ちょうどべんとうの蓋を開いたところでしたが、それを見てすばやく立って、弁当を拾って虎猫に渡そうとしました。

(虎猫)ところが虎猫は急にひどく怒り出して、折角かま猫の出した弁当も受け取らず、手をうしろに廻して、やけにからだを振りながらどなりました。「何だい。君は僕にこの弁当を喰べろというのかい。机から床の上へ落ちた弁当を君は僕に喰えというのかい。」

(かま猫)「いいえ、あなたが拾おうとなさるもんですから、拾ってあげただけでございます。」

(虎猫)「いつ僕が拾おうとしたんだ。うん。僕はただそれが事務長さんの前に落ちてあんまり失礼なもんだから、僕の机の下へ押し込もうと思ったんだ。」

(かま猫)「そうですか。私はまた、あんまり弁当があっちこっち動くもんですから……………」

(虎猫)「何だと失敬な。決闘を……………」

(黒猫)「ジャラジャラジャラジャラン。」

(N)事務長が高くどなりました。これは決闘をしろと言ってしまわせない為に、わざと邪魔をしたのです。

(黒猫)「いや、喧嘩するのはよしたまえ。かま猫君も虎猫君に喰べさせようというんで拾ったんじゃないかなろう。それから今朝いうのを忘れたが虎猫君は月給が十銭あがったよ。」

(虎猫) 虎猫は、はじめは恐い顔をしてそれでも頭を下げて聴いていましたが、とうとう、よろこんで笑い出しました。「どうもおさわがせいたしましてお申しわけございません。」それからとなりのかま猫をじろっと見て腰掛けました。

(N)みなさんぼくはかま猫に同情します。

それからまた五、六日たって、丁度これに似たことが起ったのです。こんなことがたびたび起るわけは、一つは猫どもの無精なたちと、も一つは猫の前あし即ち手が、あんまり短いためです。今度は向うの三番書記の三毛猫が、朝仕事を始める前に、筆がポロポロころがって、とうとう床に落ちました。

(三毛猫)三毛猫はすぐ立てばいいのを、骨惜みして早速前に虎猫のやった通り、両手を机越しに延ばして、それを拾い上げようと思いました。今度もやっぱり届きません。三毛猫は殊にせいが低かったので、だんだん乗り出して、とうとう足が腰掛けからはなれてしまいました。

(かま猫)かま猫は拾ってやろうかやるまいか、この前のこともありますので、しばらくためらって眼をパチパチさせて居ましたが、とうとう見るに見兼ねて、立ちあがりました。

(N)ところが丁度この時に、三毛猫はあんまり乗り出し過ぎてガタンとひっくり返ってひどく頭をついて机から落ちました。それが大分ひどい音でしたから、事務長の黒猫もびっくりして立ちあがって、うしろの棚から、気付けのアンモニア水の瓶を取りました。ところが三毛猫はすぐ起き上って、

(三毛猫)「かま猫、きさまはよくも僕を押しめしたな。」

(黒猫)「いや、三毛君。それは君のまちがいだよ。かま猫君は好意でちょっと立っただけだ、君にさわりも何もしない。しかしまあ、こんな小さなことは、なんでもありやしないじゃないか。さあ、ええとサントントンの転居届けと。ええ。」

(N)事務長はさっさと仕事にかかりました。そこで三毛猫も、仕方なく、仕事にかかりはじめましたがやっぱりたびたびこわい目をしてかま猫を見ていました。

こんな工合ですからかま猫はじつにつらいのです。

(かま猫)かま猫はあたりまえの猫になろうと何べん窓の外に寝てみましたが、どうしても夜中に寒くてくしゃみが出てたまらないので、やっぱり仕方なく竈(かまど)のなかに入るのでした。

なぜそんなに寒くなるかというのに皮がうすいため、なぜ皮が薄いかというのに、それは土用に生れたからです。やっぱり僕が悪いんだ、仕方ないなあ、かま猫は考えて、なみだをまん円な眼一杯にためました。

けれども事務長さんがあんなに親切にして下さる、それにかま猫仲間のみんながあんなに僕の事務所に居るのを名誉に思ってよろこぶのだ、どんなにつらくてもぼくはやめないぞ、きつとこらえるぞと、かま猫は泣きながら、にぎりこぶしを握りました。

( N ) ところがその事務長も、あてにならなくなりました。ある時、かま猫は運わるく風邪を引いて、足のつけねを腕(わん)のように腫らし、どうしても歩けませんでしたから、とうとう一日やすんでしまいました。

( かま猫 ) かま猫のもがきようといったらありません。泣いて泣いて泣きました。納屋の小さな窓から射し込んで来る黄いろな光をながめながら、一日一杯眼をこすって泣いていました。

( N ) その間に事務所ではこういう風でした。

( 黒猫 ) 「はてな、今日はかま猫君がまだ来んね。遅いね。」

( 白猫 ) 「なあに、海岸へでも遊びに行ったんでしょ。」

( 虎猫 ) 「いいやどこかの宴会にでも呼ばれて行ったろう」

( 黒猫 ) ( びっくりして ) 「今日どこかに宴会があるか。」

( 白猫 ) 「何でも北の方で開校式があるとかいいましたよ。」

( 黒猫 ) 「そうか。」

( 三毛猫 ) 「どうしてどうしてかま猫は、この頃はあちこちへ呼ばれているよ。何でもこんどは、おれが事務長になるとか言ってるさうだ。だから馬鹿なやつらがこわがってあらんかぎりご機嫌をとるのだ。」

( 黒猫 ) 「本とうかい。それは。」

( 三毛猫 ) 「本とうですとも。お調べになってごらんなさい。」

( 黒猫 ) 「けしからん。あいつはおれはよほど目をかけてやってあるのだ。よし。おれにも考えがある。」

( N ) そして事務所はしばらくしんとしました。

さて次の日です。

( かま猫 ) かま猫は、やっと足のはれが、ひいたので、よろこんで朝早く、ごうごう風の吹くなかを事務所へ来ました。するといつも来るとすぐ表紙を撫でて見るほど大切な自分の原簿が、自分の机の上からなくなって、向う隣り三つの机に分けてあります。

「ああ、昨日は忙がしかつたんだな、」かま猫は、なぜか胸をどきどきさせながら、かすれた声で独りごとしました。

( N ) ガタツ。扉が開いて三毛猫がはいつて来ました。

( かま猫 ) 「お早うございます。」

( N ) かま猫は立って挨拶しましたが、三毛猫はだまって腰かけて、あとはいかにも忙がしそうに帳面を繰っています。

ガタン。ピシヤン。虎猫がはいつて来ました。

( かま猫 ) 「お早うございます。」

( N ) 虎猫は見向きもしません。

( 三毛猫 ) 「お早うございます。」

( 虎猫 ) 「お早う、どうもひどい風だね。」

( N ) ガタツ、ピシヤーン。白猫が入って来ました。

( 虎猫、三毛猫 ) 「お早うございます。」

(白猫)「いや、お早う、ひどい風だね。」

(N)白猫も忙がしそうに仕事にかかりました。その時かま猫は力なく立ってだまっておじぎをしました。白猫はまるで知らないふりをしています。

ガタン、ピシヤリ。

(黒猫)「ふう、ずいぶんひどい風だね。」

(虎猫、三毛猫、白猫)「お早うございます。」

(N)三人はすばやく立っておじぎをしました。かま猫もぼんやり立って、下を向いたままおじぎをしました。

(黒猫)「まるで暴風だね、ええ。」

(N)黒猫は、かま猫を見ないでこう言いながら、もうすぐ仕事をはじめました。

(黒猫)「さあ、今日は昨日のつづきのアンモニアックの兄弟を調べて回答しなければならん。二番書記、アンモニアック兄弟の中で、南極へ行ったのは誰だ。」

(かま猫)仕事ははじまりました。かま猫はだまってうつむいていました。原簿がないのです。それを何とかいたくっても、もう声が出ませんでした。

(虎猫)「パン、ポラリスであります。」

(黒猫)「よろしい、パン、ポラリスを詳述せよ。」

(かま猫)ああ、これはぼくの仕事だ、原簿、原簿。かま猫はまるで泣くように思いました。

(白猫)「パン、ポラリス、南極探険の帰途、ヤップ島沖にて死亡、遺骸は水葬せらる。」

(かま猫)一番書記の白猫が、かま猫の原簿で読んでいます。かま猫はもうかなしくて、かなしくて頬のあたりが酸っぱくなり、そこらがきいんと鳴ったりするのをじっとこらえてうつむいて居りました。

事務所の中は、だんだん忙しく湯のようになって、仕事はずんずん進みました。みんな、ほんの時々、ちらっとこちを見るだけで、ただ一こともいいません。

そしておひるになりました。かま猫は、持って来た弁当も喰わず、じっと膝に手を置いてうつむいて居りました。

とうとうひるすぎの一時から、かま猫はしくしく泣きはじめました。そして夕方まで三時間ほど泣いたりやめたりまた泣きだしたりしたのです。

(N) それでもみんなはそんなこと、一向知らないというように面白そうに仕事をしていました。

その時です。猫どもは気が付きませんでした。事務長のうしろの窓の向うにいかめしい獅子の金いろの頭が見えました。

獅子は不審そうに、しばらく中を見ていましたが、いきなり戸口を叩いてはいつて来ました。猫どもの愕ろきようといったらありません。うろうろうろそこらをおるきまわるだけです。

(かま猫)かま猫だけが泣くのをやめて、まっすぐに立ちました。

(N) 獅子が大きなしつかりした声でいいました。

(獅子)「お前たちは何をしているか。そんなことで地理も歴史も要ったはなしでない。やめてしまえ。えい。解散を命ずる」

(N) こうして事務所は廃止になりました。

ぼくは半分獅子に同感です。